

## 研究報告

## 大島鎌吉のスポーツ思想に訊く（1） — オリンピアドを祝福するという視点において —

Discussion on Kenkichi OSHIMA's Sports Ideas（1）  
： A Viewpoint on the Celebrating of the Olympiad

伴 義孝\*

Yoshitaka Ban

### 1. はじめに

ルポライターの岡邦行が2013年に『大島鎌吉の東京オリンピック』を上梓した。

版元探しは売り込みから始めた。だが、なかなか決まらない。「オーシマケンキチ？ 誰なの？」が現実だった。（あとがき）

1949年生まれの岡が、2009年に拙著『スポーツの人 大島鎌吉』を読み、スポーツを題材にしているのに「東京五輪のことは鮮明に覚えていても大島のことは記憶にない」と恥じ入った。4年間の取材を経て出版元を探した反応が上記のとおりである。こうまでも現在の大島鎌吉（1908～1985）は知られていない。なぜなのか。そうであれば人物像を素描しておく必要がある。

明治41年（1908年）11月10日、大島は金沢市に生まれた。そして外来スポーツの黎明期に陸上競技に興じた。中学時代には三段跳で活躍し国内外で頭角を顕す大島は麒麟児と囁望され、戦後は生涯を通じて広義のオリンピック人<sup>注1)</sup>として活動する。1932年五輪ロサンゼルス大会では銅メダル。1934年から毎日新聞社運動部記者となる。1934年には15歳82センチの世界記録を樹立。1936年五輪ベルリン大会では旗手を務め六位だった。このように大島は、世界の激動期に競技経験と記者活動を

ととして世界情勢の現実問題と近代化路線の進捗状況を冷厳に見定めてきた。斯くして同時代人の水準を凌駕する特異経験が大島思想の形成要因になっている。

一方で大島は、日本が返上した1940年五輪東京大会の打開のため、代替えヘルシンキ大会への日本参加に向け環境整備を成し遂げた<sup>注2)</sup>。大島30歳。折衝のため大島は学生選手団を引率し1939年6月にドイツへ遠征する。だが第二次世界大戦（1939～1945）の勃発に遭遇した。そのまま毎日新聞特派員として駐在し6年間の「死線のドイツ」取材する（大島、1947）。この6年間に契機に始まる大島の生涯に亘ったカール・ディーム（1882～1962）を筆頭とするドイツスポーツとの交流は緊密だった。斯くしてこの「ドイツチャンネル」からの「学び<sup>注3)</sup>」は日本のその後に大きく影響することになる。しかしこうした大島経由の学びも正当に点検評価されているとは言い難い。なぜなのか。

1945年8月1日。ベルリン陥落を見届けた大島が数奇な運命を乗り越え日本へ生還する。

この「死に損ないは、やりたいことは、何でもやってやろう！」とその後の生き方を決めた。（大島、1982、p.176）

大島36歳。決心「やりたいこと」は戦争に

\* 関西大学（名誉教授）

Kansai University

因る最大の犠牲者「青少年」を救い出す育成運動に象徴されている。半世紀前の1894年6月23日。クーベルタン（1863～1937）が「近代オリンピック競技の復活」を宣言した。こうして出立した「オリンピック運動」とは、実に「青少年育成運動」を究極の目的とする「生の実践運動<sup>注4)</sup>」の一環であった。ということは、大島にとっても、青少年育成運動とオリンピック運動の志向的理念は根源的に同源なのである。

本稿では、副題の視点とも関連させて、上記に傍点を振って特筆してある2つの問題「なぜなのか」についても追及してみる。

## 2. 議論の展開と方法

大島の境涯は、選手強化対策本部長の立場で大成功に導いた1964年の第18回五輪東京大会をはじめ、その前後もオリンピックとの関係の連続だった。そして大島思想の根底には常に展望「スポーツで何ができるのか」が存在している。その間の大島は、収斂させるならばジャーナリストとして、主張の一貫する論説記事、論文、随想、著書、翻訳書などの膨大な著作物を書き遺している。（伴、1993、2013）

本稿の議論は大島の絶筆随想「明日に生きるために思うこと」（1984）の提示する問題提起を前提条件として進めることになる。随想は、オリンピック憲章の日本語表記「オリンピック競技大会の開催 Celebration of the Olympic Games」に注意し、「celebration」を簡便に「開催」と意識してしまう経緯に外来文化の壁を乗り越えることのできない「大きな誤認」を導出させていると指摘する（p.47）。

大島はジャーナリストとして用語法に厳密である。上記のごとく「明日」と書いても「あした」でなく「あす」と読む。「あした」と読むときはルビを振るか平仮名表記を用いた。こうした姿勢は生涯に亘る口癖に由来する<sup>注5)</sup>。

「…青年は未完成である。だから明日があるのだ。だから魅力があるのだ…」

もちろん少年も含む。戦後の大島は、「あす」

は「檜」になろうと一日一刻を生き抜く「青少年」を「翌檜<sup>あすなろ</sup>」に喩え、支援するため「スポーツで何ができるのか」を追求したのである。

斯くして本稿は、かかる大島問題提起を下敷きとし、「オリンピックアードを祝福するという視点」に立って議論を展開する。議論では1962年に大島の邦訳したディーム編『ピエール・ド・クベルタン オリンピックの回想』（以下「大島邦訳書」という）を軸に据えて考察を進める。

## 3. 祝福と開催

1985年3月30日に大島逝去。76歳だった。1年前に食道癌の手術を受ける。闘病生活中に前出の絶筆随想を書く。その一文は雑誌『体育科教育』（1984年10月号）の片隅に押し込まれたように載っている。

エレクトロニクスとコンピュータの開発で、わたしたちの毎日は激動のなか考え方、生き方を選択させられている。変わり方がひどいので、生き残り策を立てることは容易な仕事ではなくなった。そこで「オリンピックと世界平和」と「教育」について考えてみようと思う。（p.46、語尾改変今次）

絶筆随想はこのリード文で始まって日本状況を描写する。オリンピックと世界平和の問題が現実味を以て語られないのは、焦点が「勝ち負け」に流れるので、その環境の位置づけが「はっきりしない」ことに原因がある。そう前置きしてオリンピック憲章の読み方に不備のあることを指摘し、典型事例として前出の「開催問題」を採り上げる。大島は、絶筆随想を以て、こうした安直な理解が放置されているのは日本の「ジャーナリスト」と「研究者」の怠慢に因ると示唆したのである。

本稿では、和文憲章の定訳「開催」に相当する「celebration」を、原義「祝祭を挙げる」を尊重して、必要に応じて「祝福」と邦訳することにする。大島邦訳書も「祝福」と訳す。ここに議論の手掛かりの1つを提示してみる。

最新のオリンピック憲章には権利規定「オリンピック競技大会が開催されるべき年に開

催されない場合、開催都市の権利は取り消される」が載っている。英文は「The non-celebration of the Olympic Games during the year in which they should be held entails the cancellation of the right of the host city」である。ここでは両方を厳密に読み比べなければならない。

和文定訳「開催されるべき年に開催されない場合」は、例示するなら1940年の第12回東京五輪「返上」問題が相当するのだが、このさい「celebration」を「開催」と意識するためトートロジーの駄文に墮している。IOC公用語では、和文における前者が「should be held」に、また後者が「non-celebration」に相当して表記法も異なる。ということは、「celebration」の邦訳は矮小化を避けるためにも注意を払わなければならない。

1940年の「東京五輪」は、「celebration」の本義に忠実なとき、汚点として語られるだけであって、記録に留めおかれる経緯にはない。ところでクーベルタンは「大会を開催する」でなく、「競技を祝福する」（大島訳）と書く。このさい「大会と競技」および「開催と祝福」は深層において意義を異にする。なぜなのか。

スポーツは外来文化である。明治革命以降の日本は、外来文化の受容に当たって、その表層面における有用性のみを対象論理で物象化させて重視してきた。大島が口癖に言う。

「…オリンピックの目に見える表層面だけ捉えては駄目。それでは何も見えない…」

実に「祝福」と「開催」のこの混同を放置する文化的土壤に問題の錯綜源がある。しかも混同は日本だけではない。西欧の通念も含め、西欧に倣って近代化路線を合理的に進めてきた後進国の等しく抱える共通問題なのである。

#### 4. 大島邦訳書

1962年の大島邦訳書の上梓に際して、大島がカール・ディームの編集経緯を語る。

ようやくクベルタンの思い出の記を集めてこれを編集し初めて門外に出た。(p.3)

実のところクーベルタン原著『オリンピックの回想』は1931年の限定出版である(ナヴァセル、1975、p.3)。1936年、その原典がベルリンで翻訳された。それでは、なぜドイツ語で編集され、しかも1936年の出版なのか。この経緯については議論の痕跡を容易に見つけることができない。大島は1936年「初版編集」本を1939年にディームから直接に入手し、引き続き6年間の記者活動中に読み熟している。ところが大島邦訳は1959年のディーム編集「再版」本に拠った。その間の事情には第二次世界大戦と戦後の混乱期が介在している。それでは、なぜ1962年の邦訳なのか。この経緯も深くは議論されていない。

大島邦訳書は、大島「訳者のことば」(pp.3-4)、ディーム序文「ピエール・ド・クベルタンという人」(pp.7-14)、クーベルタン「オリンピックの回想」(pp.15-200)、1936年版編集のクーベルタンラジオ演説「近代オリビズムの哲学的原理」(pp.201-207)の構成である。これら4篇を合わせて世に問うたところに1962年上梓の大島の意図がある。意図は、4篇を歴史の前に立って読み合わせなければ、オリビズム<sup>注6)</sup>の真相を解けないと示唆している。

通常の大島は「クーベルタン」と書く。だが大島邦訳書に限っては「クベルタン」と書いた。前述のドイツチャンネルとの対話は終生つづいた。その間の事情を大島が語る。

「…ドイツ語で交わすオリンピック談義では『ク』に力点を置き、『クベルタン』という。邦訳ではその思いを籠めた…」

その大島邦訳書にクーベルタンが言う。

オリンピック競技は単なる国際的な選手権大会ではない。全世界の青少年のため、「人間の春」のために4年毎におこなわれる祭典である。(競技の祝福は)生命の門口にさしかかる若い世代の活動欲の形象に対する祭典だからである。(p.80、傍点今次)

ここにオリビズムの眼目がある。1892年、パリのソルボンヌ大学で「近代オリンピック

の復興」が提案された。聴衆は総立ちで賛成した。だが提案者クーベルタンは生涯を通してその無理解に困惑する。なぜなのか。

忘れてしまったオリンピックの理念、これをいまここでとり上げて、それを理解し1500年も前の精神と内面的本質と原則を捉えることは難しいことであった。このことが、わたしを孤独でやり場のない立場に追いやった。（同前、p.17）

実のところ1896年の第一回五輪アテネ大会以前にも、欧米ではオリンピックを名乗る行事が繰り返し開催された。だがすべては見世物、示威行為、政治利用が目的であって、「オリンピック」を「祝福する」ためではなかった。近代化路線の進歩主義に欧米の時代精神が呪縛されていたのである。そして前述の「総立ちの賛成」は経済原理を先行させる進歩主義発想に煽られてのことだった。クーベルタン思想「オリンピズム」はそのような迎合的な現実問題を容認しない。

それから100年が経つ。現代のオリンピックも依然として国威発揚や経済効果を旗印とする招致運動の標的になっている。振り返れば1962年の大島邦訳書「訳者のことば」が問う。

クーベルタン男爵がどんな人で、どんな思想の持ち主で、どんな理想を描いて、どんなに艱難辛苦して近代オリンピック競技を復活したか？ さらにこれを現代の世界最大の文化的事業に発展させるのに、どんな布石を打っていったか、あまりよく知られていない。（p.3、傍点今次）

大島が、来るべき1964年東京五輪を前にして、1962年に上梓した直接動機が上記引用文に集約されている。それではクーベルタンは如何なる布石を打ったのか。以下に幾つかを考察してみる。

## 5. 考察1：近代化路線のマイナス防止

当時の大島は「1964年」を「日本のスポーツ元年」と位置づけていた。なぜなのか。

わたしたちは大会が終わった途端に、目の前いっぱい二本の柱、即ち「競技力

の今後の強化向上」と「国民スポーツの復興」が途轍もなく大きな姿で迫っていることを発見した。（大島、1965）

大島は率先して「金メダル16・世界第三位」の大成功へ導いた。しかし「東京大会はステップストーンに過ぎない」と位置づける。そして上記引用の課題を機関誌『オリンピア<sup>注7)</sup>』の最終巻で公言した。公言は自らの課題「生の実践運動」に対する宣誓である。このさい「ステップストーン」とはクーベルタン思想「オリンピズム」を具現化させるための契機「日本のスポーツ元年」を言い当てている。ところでクーベルタン回想は第1回五輪アテネ大会が少年へ波及させた影響について注意する。

アテネで再びおこなわれたこの象徴的な競技は、少年たちに無意識に彼らの偉大な過去（古代オリンピック）を認識（祝福）させたのであった。（大島邦訳書、p.47）

クーベルタンにとって1896年五輪は「世界のスポーツ元年」であった。このさいオリンピック競技とは、前述のとおり単なる国際大会でなく、「生命の門口」にある青少年の「活動欲」を形象化させる祭典として祝福される。

その後ギリシャの各地は島々に至るまで少年たちが学校にくると「オリンピック競技」の遊びをやるようになった。（同前）

回想は年月を経れば再確認を増幅させる。そして無垢の遊び「オリンピックごっこ」が、オリンピック競技を祝福する機会毎に触発され、子供の身体文化に棲みつくと期待させた。本稿はこの経緯にオリンピズムの希求する真意があると読み解いている。だがそののち、期待が人口に膾炙されることはなかった。

ゴルフ（ギリシャの島）の神域で見た詩的な子供たちの競技（オリンピックごっこ）は、近代最初のオリンピックアードが私に残した最後の幻想だった。（同前）

1931年のクーベルタンがそうだと悲痛に回想する。なぜなのか。1925年、クーベルタンはプラハIOC総会を以て引退し終身名誉委員長となる。そのさい下記の箴言を残した。

商取引の場合、それとも神殿か！ スポー

ツマン（オリンピズムの求道者）がそれを選ぶべきである。あなた方はふたつを望むことはできない。（同前、p.14）

議論ではこの箴言を近代化路線の功罪「プラス側面とマイナス側面」を点検評価する志向性の問題提起であると捉えなければならない。実に近代化は、文化として万有のスポーツをも、現代人の捉えがちな狭義の視点「近代スポーツ＝競技スポーツ」へと押し込めてきた。だが現代社会ではスポーツの具有する多様な価値観の見直しの必要を迫られている。しかしクーベルタン自身は、100年以上も前に、この「押し込め問題」を近代化路線のマイナス側面として看破していた。斯くして子供の「オリンピックごっこ」にスポーツの原型を見出し、そのうえで「商取引か、神殿か」と「スポーツの在るべき姿」の選択を迫ったのである。

1962年6月30日。大島鎌吉が邦訳書でクーベルタンを代弁し問題提起を投げかけた。

現代のスポーツ現象の中で、オリンピック思想がほんとうに絶対意義のある理想であるのだろうか？（p.3・傍点今次）

大島の疑問は、近代ヨーロッパ科学主義の基調精神「主知主義・合理主義・進歩主義」に扇動され、プラス側面を過剰に信奉する時代精神に向けられる。そして近代化とは、スポーツをも対象論理で物象化させ、クーベルタン譬喩を借りるなら「商取引の場」へ押し込める「群集力学」の働く過程であると見做すのである。

このさいその力学を至高のプラス側面として位置づけてしまえば、予期せぬマイナス側面を誘発させ、しかも現実問題に目を閉じさせることになる。その極致が「戦争」である。斯くしてクーベルタンも大島鎌吉も、近代化の誘発させる弊害を直視し、その弊害と闘うために「スポーツで何ができるのか」という命題を自らの行動原理に据えたのであった。

大島思想では上記に問う弊害と闘うための指針を要約しきって次のように説く。

「…技術革新（近代化路線）のマイナス防止を怠るな！ 怠る儉安を許すな…」

大島は、「オリンピック」をも目に見える「開催する」という視点だけで捉えては駄目だ、目に見えない「祝福する」という本義を見逃す儉安を許すなと戒めたのである。

## 6. 考察2：歴史の前に立つ

1935年8月4日。引退後のクーベルタンが、1936年第11回五輪ベルリン大会の組織委員会事務総長カール・ディームの要請に応じて、ベルリンで「近代オリンピズムの哲学的原理」と題するラジオ演説を行った。

オリンピック競技を祝福することは、歴史の前に立ってこれをおこなうことなのである。歴史は何にも増して平和を確保してくれる。お互いに愛し合うことを諸民族に求めるのは、子供じみた願いかもしれない。しかしお互いが尊敬し合うことを求めることは、幻想ではない。わたしはもう晩年を迎えたが、第11回オリンピックアードが近づいているこのとき、わたしの願いとみなさんへの感謝の心を述べ、さらに青少年と未来について、動かしがたいわたしの信念を述べる事ができた。（フランス語の演説を1936年編集本がドイツ語に翻訳。大島邦訳書p.207、傍点と語尾改変今次）

そう呼びかけたのにはヒトラー（1889～1945）をめぐる問題が内在している。1933年、ナチス政権が確立した。ベルリン五輪招致は1931年に決まっている。実にナチスは五輪招致に反対だった。だが政権につくと政治的利用に乗り出す。他方でヒトラー「ユダヤ民族差別政策」に反対してオリンピック史上初のボイコット運動が起こった。そのさいIOCとドイツスポーツは「ヒトラー」と「ボイコット」に対峙して闘わざるをえなかった。その駆け引きの絶頂期に上記のラジオ演説が実現する。放送は結果的隠喩として「ヒトラーよ、慎め！」と公言したことになる。この経緯はオリンピック運動の歴史的な特異例として認識しておかねばならない。

ともあれオリンピック大会は開催された。

「…私は、第11回近代オリンピックを祝福するために、ベルリンオリンピック競技の開会を宣言します…」(今次直訳)

かく宣言したのは1936年8月1日の開会式でのヒトラーである。オリンピック憲章は、上記の一言一句を定める宣言以外に、国家元首に一切の関与を許容しない。この仕掛けにも大島指摘のクーベルタン布石が働いている。宣言にいう「オリンピック」とはこのさい1936年1月1日から1939年12月31日までの4年間をいう。こうしてみてくれば、1939年9月1日にヒトラーの勃発させた第二次世界大戦を以て宣言を破棄したことになる。ところでヒトラーは民主主義の手続きによって選ばれている。しかも1936年のベルリン大会が開催される時点まで絶大な国民の支持を得ていた。こうしてクーベルタン布石は、反面教師という「時代の反省」を誘導させ、現代社会にあっても「歴史の前に立つ」ことの意義を教えてくれる。

1916年の第6回五輪ベルリン大会は、ドイツの関与で始まった第一次世界大戦（1914－1918）に因って中止となった。このさい第6回オリンピックは、祝福されなかったものの、実在する。IOCは古代オリンピックに倣って歴史にそう留める。この仕掛けも絶妙なクーベルタン布石である。実にドイツは荣誉「歴史を祝福する」を放棄したのであった。そうであれば、ドイツスポーツは、失地回復のためにも、そして第11回オリンピックを祝福するためにも、ヒトラーの奸計と闘わなければならない。

為政者の多くは「オリンピック大会」の「開催」を国威発揚や政治利用のために物象的かつ時限的にしか捉えない。他方でオリピズムは、歴史の前に立って「オリンピック」の「祝福」を希求する。この対照的な二つの「ものの見方」に、大島絶筆随想の示唆する「祝福と開催」および「競技と大会」の異同のすべてが要約されている（第3節参照）。

近代ヨーロッパ科学主義は共通理解の普遍化を求める。結果として「celebration」を「開催」

と意識する安易な一様化を無反省のままに容認してきた。大島絶筆随想はこの弊害を指弾する稀有な問題提起であった。斯くして大島が、オリンピックの表層面だけに囚われたのでは何も見えないと喝破する。即ち「招致レース」や「勝ち負け」という目に見える現象面だけ採り上げるのでは歴史の前に立って議論することにならない。それゆえジャーナリストも研究者も、歴史の前に立たなければ、オリピズムを適切に点検評価できない。斯くして大島が指弾する。

### 7. 考察3：オリピズムは深化する

昨今のオリンピック憲章は「オリピズムの根本原則」を検めて問う。なぜなのか。

オリピズムは肉体と意志と精神のすべての資質を高め、バランスよく結合させる「生き方の哲学」(a philosophy of life)である。オリピズムはスポーツを文化、教育と融合させ、「生き方の創造」(to create a way of life)を探求するものである。その生き方は努力する喜び、良い規範であることの教育的価値、社会的な責任、さらに普遍的で根本的な倫理規範の尊重を基盤とする。(文中の鍵括弧と英文補記は今次挿入)

そもそもオリンピック憲章の原型が起草されたのは1914年で、成文化されるのは1925年である。それまではクーベルタンの覚え書きで運用していた。さらに表題が「オリンピック憲章 Olympic Charter」に統一されたのは1979年である。そして上記に引用した第一項目は、現在では7項目に増えているのだが、2004年に位置づけられた。そして2003年版までは二番目に書かれてあった。しかも「生き方の哲学」と「生き方の創造」という名辞は1996年版に登場するのだが、その章題は2003年版まで「根本原則 Fundamental Principles」であって、「オリピズムの根本原則 Fundamental Principles of Olympism」となるのは2004年版になってからである。ここに特筆する変遷問題は何を物語るのか。

実は上記の変遷問題への無関心が、大島絶筆随想の指摘する「オリンピック」の「環境の位置づけ」が「はっきりしない」ことを放置させている。その経緯には大島指摘「祝福と開催の異同」への無関心と等質の問題がある。本稿はこうした問題情況に照らして、以下にクーベルタン布石に関連する課題を整理してみる。

7-1 オリンピズムは、その根本理念において不変であっても、実践面においては時代相に照らして深化する。そのさいそれまで敢えて考慮する必要のなかった例えば「生き方の哲学」や「生き方の創造」などの原点志向の課題も浮上する。この経緯においてオリンピックは時代相に応じて生き方の問題として新たな課題「対抗文化」を創出させる哲学なのである。戦後すぐの大島鎌吉はこの課題を見逃さなかった。

7-2 世界保健機構(WHO)は1948年に「健康とは、身体的、精神的、社会的存在として全体的人間にとって良好な状態であり、単に病気または虚弱でないことだけではない」(筆者訳)と定義づけた。そして1998年には人間は本来的に「霊性的 spiritual な存在」であって、かつ個々人の「生き方」は生活世界と身心の「互いに連動して働く状態 a dynamic state」において構造化されるとする根源的問題の検討を開始した。その経緯にはIOCが根源的な問題「生き方の哲学・生き方の創造」を検めて視野に収める問題意識と等質の情況判断が働いている。このようにみればWHOとIOCが近年になって理念を補強するには理由がなければならない。実に理由とは、クーベルタン指摘「歴史の前に立つ」の照射する時代相の反省から生まれる課題「ものの見方」なのである。ところでこの課題を「マイナス防止」という視点において日本で最早く看破したのが大島鎌吉であった。

7-3 近代スポーツは産業革命を発祥させたイギリスに原理的な起源がある。しかし近代化路線は、そのスポーツをも対象化させ、時代精神に促され過剰な競争原理を注入させ

た。こうして競技スポーツが主流となっていく。他方でクーベルタン譬喩「商取引」の対象となって物象化される宿命を担ってしまった。一方でクーベルタンは青少年育成運動の目標として潜在する祝福すべき純粋性「神殿」に期待した。斯くして古代オリンピックの「競技的信仰 Religio athletae」(注1参照)に理想を求め、近代オリンピックが始まる。こうしてみれば近代オリンピックとは、実に近代化路線の負の連鎖が逆説的に生み出させた「対抗文化」なのである。1896年のクーベルタンは子供の遊び「オリンピックごっこ」に「スポーツの原点」があると看破している。斯くしてオリンピックは、原点志向という課題のもとに、いつの時代にあっても対抗文化として深化していく。大島視点「マイナス防止」は実にこの「対抗文化」を発祥させる本質的過程の問題を捉えている。

7-4 しかし近代化路線の負の連鎖は、産業革命の進行に相乗して、即ち大島指摘の技術革新の進行に相乗して膨らむ。そのさいオリンピックの照射する領域も変化する。1936年。即ち『オリンピックの回想』を書いた5年後にクーベルタンが回想の最終章を書き始めた。章題を「未成交響曲 La Symphonie inachevée」とする遺稿には「私のオリンピックはまだ半分も完成していない」と書き込まれている(ナヴァセル同前、p.4)。1937年9月2日、クーベルタンが逝去した。74歳。未完に終わった。結果としてオリンピックを未成交響曲と命名したがゆえに、永遠の先見性に富む布石となる。斯くしてオリンピックは、近代化路線のマイナス側面の是正という恒久的な課題に向け、原点回帰の対抗文化(生き方の身体文化)を再創造しつづける生き方の哲学なのである。大島鎌吉は「クーベルタン布石」と「オリンピック憲章の変遷過程」の相互関係を吟味することにおいてこの課題を生涯の宿題としたのであった。われわれもまた大島絶筆随想の看破した「祝福と開催の異同」にかかわる現象面に対して、原点志向「ものの見方」の立場から監視を怠ってはならな

い。

## 8. 未完成交響曲に託して

1964年10月10日。組織委員会の安川会長がアジアで初めて開催された東京オリンピックの開会式で「本年は近代オリンピック復興70周年に当たり、これを記念し近代オリンピックの父クーベルタンのありし日の声を拝聴し偉業を想起したい」と公式に呼びかけた。そしてフランス語の音源を国立競技場で流した（東京大会組織委員会、p.226）。音源は前述した1935年の「ラジオ演説」である。この経緯は、日本が歴史の前に立って如何に行動すべきなのか、その課題を示唆している。だが課題に関する議論は存在していない。ここに音源の抄訳を公式報告書からそのまま引いておく。

「オリンピックの祭典を祝うことは歴史に訴えることであり、また歴史こそ最もよく平和を確保するのに役立つものである。老境にはいった私は、大会の近づいたこの機会を利用して、青年と未来について私の不動の信念を披瀝したい」（傍点今次）

前掲の大島邦訳文（本文30頁）と読み比べてほしい。問題が2つある。1つは、大会組織委員会が何故この音源を選択したのか、その経緯を公表していないことにある。もう1つは、このさい「歴史に訴える」（歴史の前に立って祝福する）ことの意義は何処にあるのか、組織委員会が自覚していなかったと思われることにある。

先に後者から解釈する。音源の由来を承知で採用したのであれば、それは第二次世界大戦での日本の戦争責任に対し時空を超越して反省を迫ることになる。オリンピックの中止は1916年、1940年、1944年の「オリンピックアド」の三回だった。このさい1964年の音源公開はその三回における「平和の確保」を「祝福する」ことなく破綻させた経緯を指摘していることになる。換言すれば、音源はドイツと日本の関与した二回の世界大戦における戦争責任を追及するものである。しかし誰も気

づかなかった。本稿もまたその後の大島思想に促されてそうだと直覚することとなった。

前者を考察する。本稿は組織委員会が音源の由来を承知しないまま活用したと考えている。1961年。選手強化対策本部長の大島鎌吉は、日本がオリピズムについて学ぶために、講師にディームを招聘した（ディーム、1961）。大島は組織委員会の委員でもある。組織委員会も本番に向けディームから多くの助言を得ている。そのさい大島の口添えがあって音源の所在を訊き出したのではなかったか。ともかくこの経緯にはクーベルタンとディームと大島の布石が暗黙裡に融合して働いたと見做してよい。かりにも事実であれば、大島は「一部始終」を歴史に刻印するために布石を打ったことになる。

いずれにしても「2020年オリンピック・パラリンピック」に向け、大島問題提起「祝福と開催の異同」について検めて議論する必要があるか。そのうえで歴史の前に立って、「オリピズム」の志向性を展望しなければならない。オリピズムが未完成交響曲であればこそ、こうして大島思想の示唆を得て、本稿もまた議論を促すことが可能なのである。

## 9. 大島思想の核心

現役記者時代の大島を熟知する元朝日新聞運動部記者の三島庸道が、当時の記者は大島理論を聞いても「なかなか理解できなかったというか、理解しようとしなかった」と述懐している（岡、2013、p.238）。他方で同僚記者の多くが大島炯眼は「十年先を、いや三十年先を展望する」とその先見性を認めていた。斯くして東京オリンピック後に大島が「みんなのスポーツ」を提唱しても、「周りはわからない」「それが、どうした？」としか反応できなかった。

一方で大島鎌吉は創設以来の大阪体育大学で「生産体育論<sup>注8)</sup>」を講じた。そして大島思想を根拠とする「生産体育コース」が表看板でもあった。だが1985年の没後に教育課程からいづれもが消えている。大島思想が理解さ



れなかったのである。大島は学者でないことを逆説的に自認する。そして「みんなのスポーツ論」や「生産体育論」への無理解に対しては、直接に学術論文で反論することをしなかった。しかし大島が書き遺した膨大な著作物を読み熟せば、2つとも卓越する思想性に裏付けされていることが解る。しかも大島実践活動を考え合わせてみれば、著作物のすべてが近代化路線の負の連鎖に対峙し、新しいスポーツ思想の構築を企図していることも一目瞭然となる。それでは、どうして「ジャーナリスト」と「研究者」に大島思想は理解されなかったのか。

デカルト（1596～1650）とガリレイ（1564～1642）の先導で始まった近代ヨーロッパ科学主義は「目に見えるプラス側面」を照射し、知性主義、合理主義、成果主義を助長させた。他方で19世紀後半のヨーロッパでは、その動向が煽る産業革命路線「競争原理」の「危うさ」に対峙し、反省思潮「生の哲学運動」が台頭している。だが明治革命以降の日本はその生命原理の反省思潮に関心を払ってこなかった。

この経緯にすべての「答え」がある。過剰な近代化路線は負の連鎖を産出させる。だから対抗文化として近代オリンピックも始まった。そして日本の戦後における大島実践も然り。クーベルタンと大島鎌吉の共通課題は近代化途上に顕現した歴史的現実的問題「最大の過誤は戦争であって最大の犠牲者は青少年である」にある。ともあれ二人にとっては、命題「スポーツで何ができるのか」が鍵を握る。この命題を現代社会は如何に共有しているのか。他方で近代化路線のプラス側面に視点を傾注する「ジャーナリストや研究者」にあっては、反省思潮の「ものの見方」と正反対に位置して行動してきた。

実にこの歴史的現実的経緯が本稿の追及する最大課題なのである。なぜなら大島視点「技術革新のマイナス防止を怠るな！怠る儉安を許すな！」に立たないとき、大島思想もオリビズムもその真相の深層をみせてくれない。明治革命以降の日本は近代化路線のプラス側

面だけを追求してきた。状況は一般的にみて現在も変わっていない。

そうであれば大島視点は如何なる根拠を出発点にしているのか。大島は「エネルギー革命は人間の代位装置文化である」と定義する。産業革命は、即ち技術革新は、そのエネルギー革命に相乗して始まった。この代位装置に包囲されてしまえば人間性が破壊される。人間性は「動く・働く・作る」という「からだ働きの性」の関与しないところに十全に涵養できない。大島視点はこの生命原理的な洞察を以て醸成された。斯くして大島は代位装置のもたらすマイナス「負の連鎖」を防止するために生涯を賭して闘ったのである。大島思想の核心はこの一点にある（伴・2013）。

## 結語

さて「はじめに」で傍点を振って特筆しておいた2つの「なぜなのか」の問題は、さらには本文中に議論してきた幾つもの「なぜなのか」の問題は、第9節に問う大島洞察に目を向けることなく儉安を許す狭間において生起する。即ち目に見える有用性の論理で捉える近代化路線へ過剰に注がれる「プラス志向」は、大島視点「マイナス防止」を無視させる。

そして例えばオリンピックにおいても、目に見える表層面や経済効果などにしか注意しない。こうした傾向においては、スペクタクルな「大会」を「開催する」という慣用語には親しめても、目に見えない原点「祝福する」を見落とすという構図に陥りやすい。実はこの構図が「生き方の哲学」として現代人の反省しなければならぬ生活課題なのである。昨今のオリンピック憲章が「生き方の創造」という課題を問う所以もここにある。

実のところ大島絶筆随想の問いかける核心がここにある。斯くして大島思想は「スポーツで何ができるのか」という課題を追求しつづける。それにしても2020年のオリンピックを祝福するためには、2015年のいま、そして戦後70年のこの機会に、われわれは何をすればよいのか。本稿の回答は「自明であろう」

である。

## 注

- 1) オリンピアンとは狭義に「オリンピック選手や関係者」をいう。だがオリンピック運動の本旨からすれば狭義に留めておくべきではない。晩年の大島は「スポーツの敵は敵ではない、潜在能力を引き出してくれた得難い友人、まさに友愛を信奉する『オリンピック平和宗』の信徒で、地球を覆って実在する信仰集団である」と説いた（大島、1983）。実はクーベルタン「近代オリンピック競技の復活」の意図は、ここに大島が代弁して指摘する「競技的信仰 Religio athletae」を広く青少年教育の根幹に据えることにあった。
- 2) 1938年7月15日、日本は第12回五輪東京大会を返上。IOCは代替えヘルシンキ開催を決定。大島は国際スポーツにおける日本の孤立を憂慮し声明文「国際学生大会へ選手を送れ」を『陸上日本』（1939年3月号）に書く。結果として大島が「第8回国際学生競技大会」への団長兼監督となる。そのさい時の体協の意向を受けドイツとの1940年スポーツ交流を締結させ、代替え五輪ヘルシンキ大会参加の環境づくりを成し遂げた。だが遠征中の9月1日にドイツが世界第二次大戦へ突入。大島は選手団をニューヨークまで引率し現地で社命を受け、そのまま単身でベルリンへ戻り6年間の特派員活動に従事する。
- 3) 大島の特派員時代に係わった重要人脈を筆者の先行研究では「ドイツチャンネル」と命名。大島はチャンネル経由で「ゴルドンプラン」や「みんなのスポーツ運動」などを紹介し実践普及に努めた。だが先進的にすぎて日本での本質的な理解は進まなかった。
- 4) 19世紀後半から20世紀初頭にかけてドイツを発祥地として「生の哲学運動」が起こった。動因は近代哲学と近代科学のもたらす主知主義と観念主義の蔓延にある。斯くし

て「ありのままの生」を埋没させる時代相に対して反合理主義思想運動が始まった。先行研究（伴、2013）がその「生の哲学運動」と同源の実践的世直し運動を「生の実践運動」と造語で命名している。先行研究では「オリンピック運動」（1894年）、「ワンダーフォーゲル運動」（1896年）、「レクリエーション運動」（19世紀末）を生の実践運動の歴史的発祥事例として特定してある。1970年代には新たに「みんなのスポーツ運動」がヨーロッパで発祥した。実に生の実践運動は現代的課題なのである。

- 5) 筆者は1970年から1985年（大島没）まで大島に師事した。本稿の問う「大島口癖」とはその間の様々な対話の断片である。
- 6) オリンピズム（olympism・Olympismus）はクーベルタンの造語である。この思想は時代相に応じて深化を重ねている。大島は「オリンピック主義」とか「オリンピック思想」と邦訳する。昨今のオリンピック憲章は「生き方の哲学」および「生き方の創造」と意識している。
- 7) 1960年1月18日、東京オリンピック選手強化対策本部が設立。1960年7月1日、大島発意の機関誌『オリンピア』を創刊。同誌は終刊（1965年1月1日）まで本部活動の全記録を収載。日本のオリンピック運動を歴史の前に立って記録に残す貴重文献である。
- 8) 人間は知性原理の生産動物であり生命原理の消費動物である。生産体育論は、その両義性のインバランス問題と人間形成の関係について追究し、近代化路線のマイナス防止という視点から構想されている。だが、体育研究者はこの問題提起を追求してこなかった。いまこそ大島「生産体育」論の歴史的現時的な点検評価が必要である。

## 引用・参考文献

- 伴義孝・中島直矢（1993）：スポーツの人 大島鎌吉、関西大学出版部。  
伴義孝（2013）：大島鎌吉というスポーツ思想

- 一脱近代化の身体文化論一、関西大学出版部。  
クーベルタン (1931)：オリンピックの回想、  
大島邦訳書所収 pp.15 - 200.  
クーベルタン (1935)：近代オリムピズムスの  
哲学的原理、大島邦訳書所収 pp.201 - 207.  
ディーム (1936)：ピエール・ド・クベルタン  
という人、大島邦訳書所収 pp.7 - 14.  
ディーム (1961)：オリンピック競技の歴史と  
意義、オリンピア No.6 pp.2 - 10)  
ディーム編・大島鎌吉訳 (1962)：ピエール・ド・  
クベルタン オリンピックの回想、ベースボー  
ル・マガジン社。  
Navacelle (1975)：Comments on the Olympic  
Memoirs、Olympic Memoirs by Pierre de  
Coubertin (IOC、1979、pp.3 - 4)。  
大島鎌吉 (1939)：声明文「国際学生大会へ選  
手を送れ」、陸上日本 3月号 p.24。  
大島鎌吉 (1947)：死線のドイツ、鱒書房。  
大島鎌吉 (1962)：訳者のことば、大島邦訳書  
所収 pp.3 - 4。  
大島鎌吉 (1965)：あすに向かったの命題、オ  
リンピア (1月号・巻頭言)。  
大島鎌吉 (1982)：「オリンピック平和賞」受  
賞に寄せて、月刊陸上 10月号 pp.173 -  
178。  
大島鎌吉 (1983)：アピール=オリンピックと  
世界平和一飢えに泣く難民に救済の手を！  
一、関西大学体育OB会編パンフレット。  
大島鎌吉 (1984)：明日に生きるために思うこ  
と、体育科教育 10月号 pp.46 - 47。  
岡邦行 (2013)：大島鎌吉の東京オリンピック、  
東海教育研究所。  
オリンピック東京大会組織委員会 (1966)：公  
式報告書『第十八回オリンピック競技大会・  
下』、同組織委員会。  
(平成27年9月16日受付、平成27年11月10  
日受理)